取材後記

山中 潤

安部さんの作品を貫く悲しみは、読む人を惹かずにいない。人を制する、逃れ難い性の力に、自己の罪の告白を描き続けることによって、挑もうとした漫画家。それは余りに無謀であったし、痛々しさにも過ぎたので。いつしか誰もが目を逸らしてしまった。現在入手可能な単行本は無い（もちろんこれは我々の責任でもある）。

●

それは青林堂を継いだ時、とにかく読んでみようと床に並べた5メートルはあるガロの途中で出会った。『ねじ式』や『赤色エレジー』が輝いていたガロ最盛期の終盤に、突如展開された中央線沿線ライブの伝説として。当時の『アベシン』を見ようとすれば、隣にいつも『オージ』がいた、そして当時の風俗や音楽や憧れた文士が潜んでいた。その時の二人はガロを占拠したかのように見える。漫画に肉体を導入し、徒党を組み、原動機として酒を用い、他のカルチャーとの共闘を試みた。これには当時、良く思わなかった人もいたに違いないが。

●

九州に安部さんを訪ねる以前、幾つかの噂を聞いていた。大体は恐い人なので気をつけた方が良いといったものだった。僕にも昔のガロで見た黒帯の柔道着を身に着けたイメージがあった。昔、阿佐ヶ谷時代は相当荒っぽかったようだ。また宗教の噂も聞いた。自ら教祖として道場をひらいているとも聞いた。しかし、現在は縫製工場の経営者というのが本職らしい。

去年二つの郵便物を安部さんより頂いた。一つは安部さんの知り合いからで、生き方の本だった。そしてもう一つは安部さん自身からで、漫画を描いて頂けるような事が書かれてあり、電話番号が添えてあった。僕は何かが始まるかなといった予感のまま、葉書を本棚に挟んでおいた。

それから数か月経って、名作劇場に安部さんが決まった。電話すると安部さんは既に僕を知ってるような様子で、予想に反して恐いといった感じではなかった。明日伺う事を告げ、電話を切った。

●

新幹線の車窓から、初めて訪れる小倉の街を見た。都市の中に巨大な工場がそびえていた、それも二つ、煙突の高さを競うように内側から街を挟んでいた。安部さんの炭鉱漫画を思い浮かべた。『ガロ曼陀羅』で安部さんは「三井という事業主と炭坑夫」といった表現をされていた。財閥といったものは、今まで自分にとってリアリティなどなかったのだが、「この街にはまだあの感覚が生きているのかも知れない」と、思った。

●

レンタカーを借りて安部さんの住む田川に向かった。帰りのタクシーで知ったことだけど、田川は当時最も大きな炭鉱町だったらしく、その頃は古河とか複数の財閥が入っていたが、一番大きくやっていたのが三井だったそうだ。炭鉱自体は昭和三十四年頃に終わっていて、今日、残されていた炭鉱の櫓を取り壊すと新聞に記事が出ていたと聞いた。

幾つか山を越えてたどり着いた田川は、大きな山自体が町になっている不思議な処だった。頂上付近に市役所など公共施設が点在していて、そこからバラバラに下って行く道沿いに町が展開していた。向こうには巨大な山が頂上から三分の一辺りで、刃物で水平に切ったように無くなっていた。安部さんの家は中腹の商店街の裏側にあった。

二階建ての工場に接して立派な作りの母屋があった。玄関に入って声を掛けたが返事がないので暫く突っ立っていた。下駄箱に金魚の水槽があり、その横に『安部慎一様』と書かれた郵便物が積まれていた。正面と側面には油絵が掛かっていて、安部さんの画いたものらしいが、深い色で描かれた素晴らしいものだった。しばらくすると従業員らしい女の人が走ってきたので呼び止めた。

奥の安部さんの部屋で初めての対面をした。安部さんはストーブの横に正座してにこやかにされていた。想像していたのとは違って、やさしそうなおじさんという風だった。しかし目だけは、穏やかなままだけど、深海魚のようにすわっていた。僕は一見して恐ろしさを感じたが、同時にただ者では無い様にも思え、ゾクゾクともした。

部屋の中央に年季の入った机が置かれていて、脇には油絵の筆を中心とした道具が整頓され並んでいた、漫画の道具もあった。本棚にガロは一冊しかなかった。薄暗いその空間は何かを待ち続けている様にも見えた。この十年、座禅を組み続けている安部さんを想像した。

もう夕方だったので、太陽のあるうちに写真を撮らせてもらうお願いをし、二人で外に出た。最近では人と話す事が徐々に苦痛になり、酒が必要なのですと言っていた。ただ元々酒は弱い上に最近は病気が絡んで、益々弱くなっているとも言っていた。既に多少呑んでいる様子だった。

家のすぐ上には炭鉱住宅が当時のままに広がっていた。木造の共同住宅が、何十群と一様に建ち並んでいた。炭鉱は三十年前作業を終えたが、生活は今も営まれている様だった。安部さん自身は、炭鉱の記憶は殆どないということだった。ただ、お父さんが炭鉱夫の集め人をやっていたらしく、町ではそこそこ力を持つ人だったらしい。また、「当時炭住には混浴しかなく、いくら惚れ抜いた自慢の妻を持っても、風呂場では同僚達に裸体をさらさねばならなかったのです」などの話を聞かせてくれた。『阿佐ヶ谷心中』『よし子の幸福』など安部さんの傑作ではそんな性と所有の問題が描かれていることが多い。

家に戻って奥さん（美代子さん）と会う。綺麗な顔立ちをされている、話した感じが若い、失礼だが年の差を感じさせない、生活の疲れを感じさせない。

●

戻り際に安部さんはカップ酒を一本買ってきた。インタビューはそれを呑みながら、先ほどの部屋で行われた。始めてみると、どうもうまく質問できない。元々インタビューは大下手なのだが、特に今日はうまくいかない。しばらく話して、どうも理由の一つは、僕が「いつ頃どこにいたか」の様な質問ばかりするのがいけないのだと気づいた。安部さんは「あなたは僕と話しに来たのか」と言う。しかし気づいた頃にはカップ酒はもう一本増えていて、安部さんはかなり酔っ払っていた。安部さんは何か質問しても唸ったままで答えない。沈黙が度々続く。それでは原稿を書いて送って貰えないかと頼むと、「いま書く」といって机に座り、万年筆をにぎり考え込む。タイトルと名前を書き込んだ後原稿用紙を破り捨て、今度は僕の手を両手で握り、深々と礼をした後、しばらく激しく睨む。それを二

回ほど繰り返した後、ラーメンを頼んでくれ、「今日はわざわざ来てくれてありがとう」と、言い残して寝てしまった。

安部さんは今後のガロの事を一緒に考えようと思われていたのかもしれない。所々で言いかけたけれど、僕が年譜にこだわったので諦めてしまった。失礼なことをしてしまった。僕はラーメンを頂いた後、奥さんにお礼を言って帰路についた。先ほどのテープを再生しながら帰った。聞くと随分鋭い忠告が混じっている。「山中さんにかわって作家として大変さを感じる」という話は、内心自分でも気づいていた話なので、深く考えさせられた。宗教家は元来待つことが役割だと思う、なれそうにない。

その後安部さんから二通手紙を頂いた。インタビューの回答だ。安部さんは酔っ払ってなどいなかった。校正はいらないので見たとおり感じたとおり書いてくれていい、ということだった。安部さんの許可を得て手紙も掲載する。その後、一度電話で話した。「またお会いしたいですね」と言われた。僕もまた田川に行きたいと思った。

◀『阿佐ヶ谷心中』より

青春に何を求めていたか

安部慎一

私は、高橋新次教を学ぶに及び漫画を捨てて来た。性は大事な問題であるが、性をもて遊ぶと罪である。私の中には、その罪の意識が今も有る。

私は永島慎二師の『青春裁判』を観て、そこに魂の存在を知り、漫画に目覚めたのであるが、商業ベースの中で師とは、大きく道をはずれて来た。永島師はあくまでも人間性を追及していた、私はただ絵が画けると云うだけで内面解決すらできなかった。

美代子と同棲する為に美代子の親友と寝た。この一点は私の中に大きな罪の意識をもたらした。私が美代子以外の女性と関係したのは、若い頃の一度だけである。一人の女性に操を立てるという事は、男にとっても大事な事である。Kという女性と関係したことで私と美代子の一生は大きくつまづいた。私は罪の意識を解消する為に、私の友人と美代子を関係させた、しかしそれこそ罪の上塗りであった。漫画は美代子の裸体に魅かれるまま、画様になった。私は途中、油絵を始めたのも美代子の裸体を描きたかったからである。罪の意識から私と美代子の関係は、こういう風にがんじがらめに成ってしまった。若き日の漫画作品を否定することは、誰にとっても辛い事であろう。せっかく生きてきた技を否定するのである。しかし悪い作品は自己解決せねばならない。山中氏の来訪を受け自己弁護するのは私が甘いからであった。酒を呑むのもそういう罪の意識があるからである。

後年私は分裂症の診断を受けるに至った。医師は深酒をさけるよう忠告をする、私は酒に弱くなった。人間性そのものが病人の意識になった。現在42歳である、それがあたかも老人のように愚痴っぽくなった。高橋新次教では愚痴は禁止されている。

心の三毒は愚痴、怒り、足る事を知らぬ欲望である。私に才能が有ると云ってほめてくれる人は有り難いが、私の作品すべてに罪は色濃く反映されている。「才能だけに頼っていると年をとって苦労する」と高橋氏は云っている。私は年をとってないのにもう苦労している。青春期に名声を求めていると私の様に苦しむ事になる。人はまっとうな道を貫くべきである。わずかの名声にひかれて人生を踏み外してはいけない。また、自己の精神分析を楽しんではいけない。私の作品を読み、二人自殺した人がいる。自殺の罪は殺人と同様最も大きい、作品の責任である。

自分の画く作品には責任を取らされる。私は分裂症という重荷を背負って苦しんでいる。酒が悪いのではなく、生き方が間違っていた、私の才能はわずかのものである。むしろ才能にとぼしく周囲の愛に甘えて来た、そういう風に私の作品を読んで欲しい、それは作者にとって良い反省の材料になる。愛を実践すべきであった。

青春期に何を求めていたか、それは愛であり謎である。私も苦しんできた、やがて私同様に愛のとぼしい者は反省をさせられる。慈悲の心も大事である。慈悲とは神と直結する意識である。

「慈悲はタテの糸、愛はヨコの糸」と高橋氏は書いている。突然の山中氏の来訪に私は大いにあわてた、そして良い勉強になった。うぬぼれの心がすっかり消えてしまった、それは山中氏のある種の忠告の心であろう。深く感謝してこの短文を終えたい。

◀『阿佐ヶ谷心中』より

阿佐ヶ谷の
彼の部屋であたし
平和よ

美代子阿佐ケ谷気分

安部慎一

ごしそ
ごしそ

ん
ごしそ
ごそ

ちりり

ちりり
ちりり

十時かぁ
も一日
休むか
ごそ
ごそ
ミヨちゃん
って
ダメねー

びろーん

眠たー

あた

書きそこ
間違い

さてと
今朝の
おかずは……

リンゴに
するか

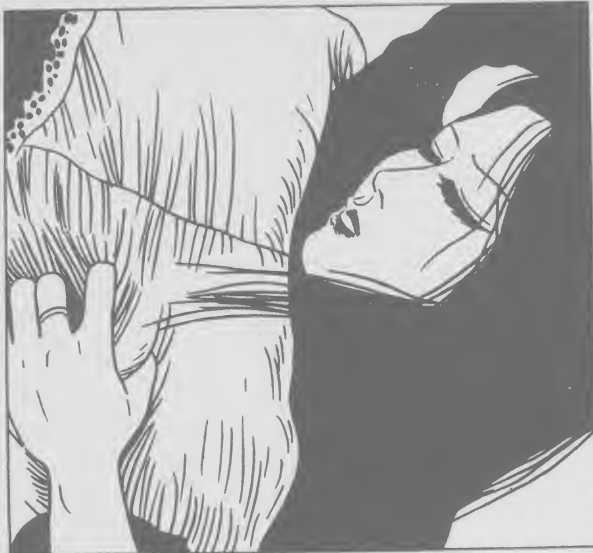
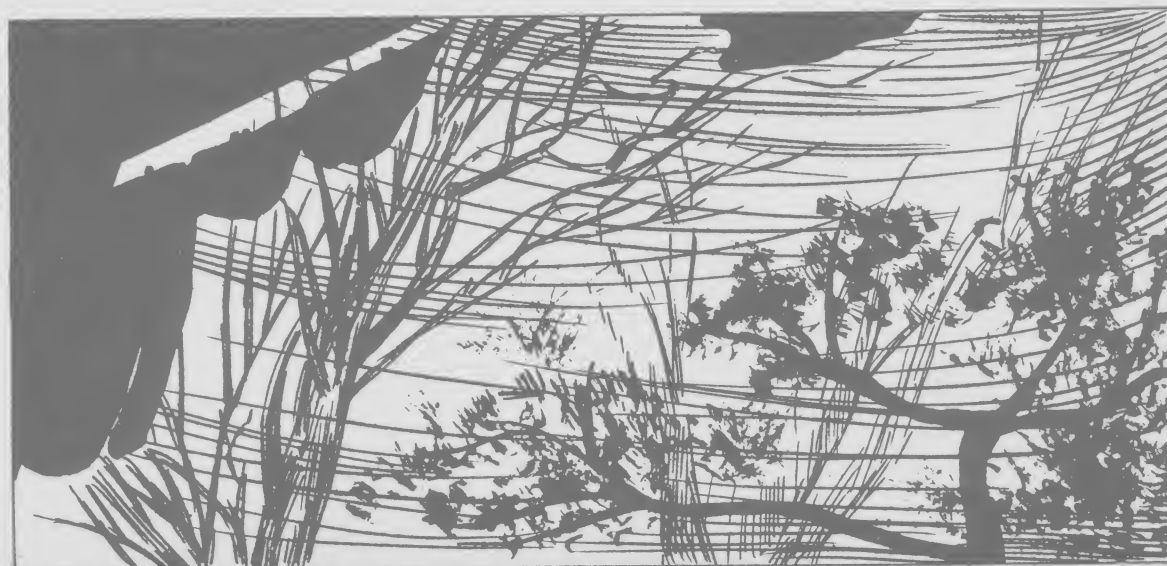
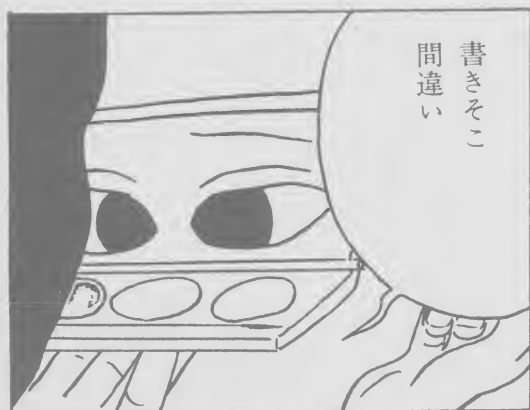
彼居ない
時って
みんな面倒

第一みみっちい
のよ、お米
研ぐのって

あたし
この恋が
終ったら

二号さんにでも
なるわ
きっと
BEATLS

お金持ちで
紳士で
ハゲてない人

借金表

日の暮れるの
早いなあ

彼どこ行った
のかなー
また
ぶらぶらっと
かなー

大変

千円も
百円も

使い
ごごち
変わん
ない
だって

うちのは
千円だ
もんね

千円は
あたしの
資本だ
もんね

貧乏よ
彼って
でもあの仕事って売れたらガッポリだって！
要するに

将来性があるのね

もーおやめた～

ホント言うとあたし
遅れてるの

もう……
二週間め
今度はホントよ

子供なんか嫌い！

殺す他
ないわね

あんたにゃ
わかるめ

パチン
帰ったのかな

よーし

よーし

Shin.
'70.11.17